

福井の幕末明治 歴史秘話

<第30号>

平成29年8月22日発行

松平春嶽を教え導いた改革の士、鈴木主税！

西郷隆盛が敬慕し、諸国の志士が、教えを請いに訪ねたことで知られる水戸の尊王攘夷の思想家、藤田東湖。今回は、彼から、“豪傑”として西郷と並び称された鈴木主税（すずきちから）を取り上げます。

鈴木主税は、文化11（1814）年、福井藩士、海福正敬の子として生まれ、後に鈴木長恒の養子となりました。多感な青年期に福井藩の儒学者、清田丹藏に政治的实践を重視する崎門学を学びます。天保8（1837）年、寺社町奉行であった養父、鈴木長恒のあとを継いで出仕し、5年後の天保13（1842）年に寺社町奉行に就任しました。公平公正な行政手腕で城下の町民から慕われ、その功により、弘化2（1845）年、福井藩主松平春嶽の側近に取り立てられます。



鈴木主税肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

鈴木主税は、藩主である松平春嶽の成長が、福井藩を立て直すことにつながると信じ、厳しく教育したと言います。「慶永公名臣建言録」には、こんなエピソードが残っています。

ある日春嶽は、家臣に対して“庭の手入れは当然必要ない”と命じましたが、間もなく“手入れをしろ”と命じました。それを聞いた主税は春嶽の発言の矛盾を指摘。“領民の悩みや苦しきよりは、よほど庭木の方が大切であるようにお見受けいたします”と述べ、藩主として、今、何を優先すべきか、厳しく春嶽を戒めました。後に春嶽は、「眞雪草紙（みゆきぞうし）」の中で、主税のことを“私を補佐してくれた忘れることのない恩人”と述べています。春嶽が幕末の政治に重きをなし、明君と称されるに至ったのは、主税など家臣たちの教育の賜物だったのです。

嘉永6（1853）年6月、ペリーが浦賀に来航。開国か攘夷か、国論を二分する事態のなか、鈴木主税は江戸に赴きました。主税は松平春嶽に“大いに民風を振り起こし、国防を充実し、国家の威信を発揚せねばならぬ”と建言し、以後、春嶽の側近として將軍継嗣問題など国事の処理に携わっていきます。

この頃の諸藩の名士たちとの交流の中で、こんなエピソードが残っています。主税は、水戸藩の藤田東湖、熊本藩の長岡監物らと腹を割って、諸外国への対応を論じ合いました。藤田東湖は主税について“真に豪傑と称すべき者、天下にただ鈴木主税と西郷隆盛のみ”と、また、長岡監物は“智徳兼ね備わるは主税に及ぶ者はなし”と称賛したと言われています。

安政3（1856）年2月、鈴木主税は43歳でこの世を去ります。その時、主税は側にいた橋本左内に対して“私の志を遂げるのは君しかいない。天下のため活躍を願う”と後事を託しました。春嶽や左内らに受け継がれた主税の志。その一つ一つは、幕末から明治の大改革の道標となったに違いありません。

<参考資料>我等の郷土と人物（福井県文化誌刊行会）、若越山脈第7集（青少年育成福井県民会議）

～幕末ふくい歴史紀行～ [主税を生前から祭神として祀る世直（よなおり）神社]

主税は、木田荒町の町民にのみ課せられていた悪税「あおだ（※）」を撤廃したため、町民から「世直大明神」として崇拝され、生前に生き神として祀られました。

※「あおだ」…町で行き倒れた旅人を本籍地に送り返す費用等を地域が負担する税

【住所】福井市みのり1丁目、福井市みのり3丁目



★お知らせ 県立こども歴史文化館 夏の特別展「イリュージョン～先人ゆかりのトリック&マジック～」開催中
さまざまなトリック作品、奇術関連資料を展示し福井出身で世界の舞台で活躍した日本近代奇術の祖・松旭斎
天一や奇術普及の立役者・松旭斎天洋など、ふくいの先人たちを紹介しています。

【住所】福井市城東1-18-21 【期間】9月10日（日）まで